
それでも私たちは...

ナモナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも私たちは…

【Nコード】

N5168E

【作者名】

ナモナ

【あらすじ】

ある冬の夜、かわりばえもしないありふれた一夜を過ごす少年と、少し年上のお姉さんの物語。大人に対する思いを胸に秘めながら、二人は今日もいつもどおりの一日を普通に過ごす。

（前書き）

注意

ほんとにただの一日を描いているだけの小説なので、
ずば抜けた恋愛などをお求めの方には「ふーん」程度にしか感じられない小説になっております。

それでもこの小説を読んでくれた人には感謝します。ありがとうございます。

しんしんと降り続ける真っ白な粉雪…。

冷えた地面に薄っすら覆い被さり、見る間もなく積もっていくのだろ…。

大袈裟過ぎるかも知れないが、それくらい空から舞い降りる白い粉雪の量は半端ではなかった…。

六階建市営団地の一号棟。最上階。

ある小学生くらいの少年が、自分の部屋から見える雪景色を眺めながら頬杖をしていた。

ボーっとしているにも関わらず、何処か嬉しそうな表情を浮かべるその姿は、かなり曖昧ではあるが、その姿を見る者はこの場にいなかった…。

時刻は八時過ぎ…。雪化粧に彩られた綺麗な町の明かりのひとつひとつが、どれも宝石のように感じられた…。そんな景色に魅入られながら、少年は何を思っただろうか？

月の光に見放された薄暗い灰色の町は、それでも建物が放つ様々なイルミネーションで頼りない光を放っていた…。

静かな町、音でさえ凍りつきそうな景色を眺めながら、母がいてくれたコーンポタージュを静かにすす…。

体の芯から温まりそうな熱さとスープ独自の味わい、そして母の惜しめない愛情が注ぎ込まれたポタージュスープは高級料理店が出るソレとは比べ物にならない程美味しかった…。

ホッ。といい溜息を吐き、改めて景色を眺める…。

遠くで徐行する鈍行電車、満員であるかどうかは分からない。

意外に普通のスピードで走る車、こんな夜は徐行が一番だと少年は思う。

歩く人…。は、いない。というより、見えない。

山、薄暗くてあまり見えないが、鉄塔であろう先端が赤く光る…。

ベランダの鉄格子越しに見える景色はこんなもんだった…。

もう一度母が入れてくれた最高のコーンポタージュスープを「ふーふー」しながらすすする…。

「ホッ…」

こうなってしまうのも母がいてくれたスープのおかげかもしれないが、

心地良さの他に、心穏やかに、そして信じられない程の落ち着きを得る少年…。

何故だろうか？と、思いつつもその静かな波に身を任せる…。

コンコン…ガチャ…。

「翔太くん、お母さん仕事行ってくるね。……1時過ぎに帰るから」

園田翔太

(ソノダ ショウタ)

小学校6年生。

年相応の元気良さはあるが、物欲などがあまりない少年。

夢に思いを馳せ、今を生きる。

週末だけ夜の仕事をしている母が、返事も待たずにドアを開けた…。

翔太と呼ばれた少年は、母の声に振り向き、その姿を目に映つたす。

綺麗な姿に優しい目、シンプルな短い髪、厚化粧ではない顔、二十歳前半といってもある程度の人には騙せるであろう三十三の母…。無理を感じさせない若作りに感心しながら、母の言葉に返事をする。

「…うん。わかった。…氷花さんはまだ来ないの？」

「…ん？もうすぐ来るわ」

簡単な言葉のやりとりを終え、再び窓の向こうを眺める。

背を向け、ズズ…。と、スープをすすする姿が何処か可愛らしく、そんな息子へと歩み寄る母。

「結構降ってきたわね」

外を眺めながらも、チラチラ横目で母を見る…。

闇の世界を彩る町の光を眺める母は、何処か寂しげに見えたのは気のせいだろうか？

何か悩みがあるのだろうか？

気のせいかもしれないが、そんな母に喋りかけようと無い頭をフル稼働させ、

搾り出すように思いついた言葉はこれだった。

「…町の光が綺麗だね…」

「…ふふ、落ち着いたその喋り方、ちょっと大人っぽいじゃない」

母の言葉にポカーンとする翔太。

しかし一瞬ではあるが、笑ってくれた母に安心する…。

「…えーっと僕、来年から中学生なんだけど？…中学生って大人だよ？だから大人っぽいじゃなくて、大人なんだよ。わかる？」

異議を唱える息子を笑いながら無視し、改めて外を眺める母…。空高くから舞い降りる粉雪…。

今夜の仕事は忙しくなるのだろうか？それとも平和に暇を過ごさせてくれるのだろうか？

腕時計を見ると、時刻は八時半だった。

「さて、そろそろかな…？」

そう呟きつつ、なおも隣でブツブツと不貞腐れる息子の可愛らしさにもう一度微笑み、歩き出そうとしたその時だ。

ピンポーン…。ベルの電池が無くなり掛けているのだろうか？
情けないベルの音が部屋一杯に響き渡るが、気にも止めず二人は言葉交わす…。

「…あ、来たかな？」

「ええ、そうね。…はーい」

パタパタとスリッパをパタつかせながら小走りで去っていく母を見送る翔太は、普段拝められない珍しい雪景色に再び目を奪われる。
外は本当に静かな世界だった……………。

短編小説

―それでも私たちは…―

「…ごめん、絵里。待った？……今日も頑張ろうか」
玄関から聞こえてくる声…。母の名を呼ぶお隣さんだ…。
少し家計に悩む少年の母・絵里とお隣さんは、二人揃って昼間の仕事とは別に、同じスナックで週1・2回働き生計をたてる。
そんな母にありがたみを感じつつも、翔太は窓の向こうに見える幻想的な世界に目を奪われる…。

「お疲れ、恵子。……お、氷花ちゃん、今日も可愛いねー」
「…お、おばさん。親父はいつてるし。……ぎゃあっ！」
お隣さんの娘、中学生の氷花と母のやりとり…。
どんな絵でやりとりされているか分からないが、氷花の女らしさを感じさせない断末魔にも似た悲鳴が翔太を笑わせた…。
「氷花さん…。オカンにそれをいっちゃあダメだよ…」

村越氷花

（ムラコシ ヒョウカ）

中学校3年生の微妙なお年頃の少女。
母親譲りの優しさと、父親譲りの行動力を併せ持つ。
翔太とは大の仲良し。

禁句極まりない言葉を吐いた氷花に微笑を捧げる翔太。だが、彼女はこの場にいない。

一体母に何をされたのだろうか？
されたことは分からないが、確かに分かることがひとつある。
「…団地中に響き渡ったな…。氷花さん、また有名になるよ…」

「恵子。…今日はまったく予想が出来ないから気いだけは抜かないようにね」

「ええ…。寂しさを満たしたい人が一杯いるかもしれないからね…。それじゃあ氷花、お母さんたち仕事行つて来るわ」

「いつてらっしゃい。…絵里さんも頑張つてね」

ヒールの音と、ドアの鍵を閉める音が団地の廊下に響き渡る…。しかしそれは氷花の悲鳴よりとても静かだった。

心の中で「いつてらっしゃい」を呟き、次はちゃんと見送ろう…。そう思いつつ、ギシギシと床を軋ませながら翔太の部屋にやってきたのは情けない悲鳴をあげた氷花だった…。

「…おーっす。元氣？翔太君」

椅子を回転させ振り向けば、片手に枕、片手にスーパーの袋を提げた氷花がいた。

黄色いパジャマ。可愛らしい花柄のソレはとても季節外れな色。

しかしとても似合っていたので、翔太は無難にニコツ。と、笑顔で応答。

絵里達が留守にする週末は、こうやって一夜を共にする二人。たった一人部屋に残すなんてもつての他だったのだろう。

そのおかげで二人はまるで修学旅行を楽しむような…。お泊り会を楽しむような…。

ささやかなイベントに対して様々な思いが生まれる。

そしてお互い、このような夜は何を感じているのだろうか？と、思う。

「…こんばんは氷花さん。…今日はオカンからどんなことされたの？」

その言葉にグテツ。と、ダルそうな表情を浮かべる氷花。

毎度のことであるが、毎回違う表情を拝められてとても楽しい…。ダルそうな表情に思わず含み笑いをする…。

「あ、ちよつと…。笑うのはひどいぜ？…絵里さん…今日はオシリ

触ってきたよ」

言葉の最後を少し甲高く、目をギュツと閉じ、静かに叫ぶ氷花…。
続けて寝巻き姿の氷花は自分のヒップを軽く手の平で叩く…。

大袈裟でもないがその行動により、さり気無く漂ってくる風呂上りの匂いが部屋一杯に広がった……。

内心ウツトリしそうな翔太は子供なりに平静を装うが、気を許せば本当にウツトリとした情けない顔を氷花に目撃されるかもしれない…。それだけは避けたい翔太は、そうならない為にも話題を少しだけ曲げようと喋りだした。

「…そういえば恵子おばさんの声、あまり聞こえなかったけどどうしたの？」

「ん？…別にどうもしないよ。…ウチのお母さんは静かだからね！
…ちゃんと見送ったよ」

あはは。と笑いながら、折り畳まれた翔太の布団にドカツと腰をおろす。

少し埃が舞ったのはこの際気にしないでおこう…。翔太はそう思いながらも、再び窓の向こうに見える雪に彩られた景色を眺める。

「…初雪綺麗だね。…ウチのベランダも凄かったよ」

布団の上から翔太が眺める先を眺めるが、部屋の明かりがいい具合に反射しよく見えなかった…。座ったばかりの腰をあげ、翔太の隣へと数歩歩く氷花…。

「…うん。すごいすごい。……こりゃ明日の朝はすごい町が拝めるよ」

視界の端に映る氷花の素肌…。漂う石鹸の匂い…。正直翔太はよいお年頃だった。

例えばそれが首筋であろうと、間近で目にするにはとても頂けない…。

ありえないことに翔太の心臓は激しい凝縮を繰り返していた…。

そして、理解出来ない感情が芽生える中、素知らぬ顔でもう一度窓の向こうを眺める…。

見るもの殆どが灰色だが、真っ白であろう世界を見つめ、己の心も真っ白に染め上げようとがく…。

「……こ、こんな積もってるのに、まだ降るんだね……」

「……この粉雪、まるで…ケサランパサランね。………幸せな気分になるよ…」

フツと微笑みながら、窓から見える薄暗い空を眺める。

視界の端の端に映る氷花の瞳…。

何かに思いを馳せる表情がとても可愛らしく、しかし何処か寂しそうな表情に、先程一緒に窓の向こうを眺めていた母の顔を思い出す…。

氷花は何を考えているのだろうか？まったく分からなかった。

それは自分がまだ幼いからなのだろうか？それとも男だからなのか？母と同じ性別の氷花にいえる言葉はこれだけだった…。

「…ケサランパサランって何？」

「ゴホンッ。…ケサランパサラン。…寄生してどうすんのよ？………ていうか翔太君、今のワザとでしょ？」

いい終わると同時にこちらへ顔を向け、口元を歪めながらニヤニヤする氷花は三つも離れている自分を小馬鹿にしているのだろうか？
真実は氷花とともに…。

「うおっほんっ。ケサランパサランっていうのは………えーっと、私もあまり知らないんだけど、幸せを運ぶ微生物？白い綿？それとも妖怪？はたまたB級映画に出てきそうな化物？………兎に角、幸せを運ぶペリカン便みたいなもの。…かな」

偉そうな咳払いをしておきながら言葉につまる氷花も何処か可笑し

かった…。

そんな行動に駆らせたのは年上であるが故であろうか？

「……マジ？…ペ、ペリカン便つて赤ちゃんを連れてきてくれるんじゃない？…！？」

ポカーン。そんな表情に陥る氷花。

目の前にいる少年は一体母親から何を聞かされたのだろうか？

聞いても明確な返答が返つて来ないことを彼は母に質問したのだろうか？

そして自分の説明不足を呪う。

「……や、やあねー。子供を授けてくれるとかどうかなんて、あなた来年の保健体育で教えてもらえるよ？」

今時ありえない嘘を真に受ける翔太を笑えばいいのだろうか？それとも顔を赤く染めればいいのだろうか？その辺りが分からない氷花…。

「…ま、まあ言伝えによると、…ケサランパサランは幸せを運んでくれるの。幸せの度合いは分からないけど、ケサランパサランに出会えた人たちは、皆ささやかな幸せを手に入れてるわ…」

言伝えであろうが、なんであろうが、そんな夢物語が現実にも存在していたらいいな。と、思う氷花。

そう思うに値する悩みがあるのだろうか？それだけは彼女の心を切り開かない限り分からない…。

突如、影掛かった氷花の意味ありげな表情を目の当たりにする翔太…。

心配しつつも何を思ったのか「影のある表情もとても綺麗だな」と、魅力的に捉える。

そんな隣に佇む氷花に淡い感情が芽生えるが、この場合自己嫌悪を抱かなければいけないのだろうか？

少年にはまだ分らないことだらけだった…。

「氷花さんは願い事ってある？」

自分が座っていた席を彼女に譲ろうと立ち上がり、コタツに座る翔太は問い掛けた。

しかし氷花はソレには座らず、翔太と同じように体一杯コタツの中に潜り込ませ、向き合いながら質問の答えを導き出す…。

願い事…。夢に希望を馳せる事は別に悪い事じゃない。

所詮夢は夢のまた夢で終わるのだから…。だが、たまに馳せるのは少し楽しかった。

例えば自己満足で終わろうとも…。しかし氷花はこういった。

「……翔太君は？」

質問を質問で返される小学六年生。

あまり体験した事の無い質問返しに数秒黙りこみ、眉間にシワを寄せ悩む姿が面白可笑しかった…。

「……大人になって、オカンを助けてい」

欲張らない望み。現実的な望み。

夢のまた夢で終わらせるはずのこの他愛も無い会話に、ただ一言「大人に…」と、呟く翔太。例えば夢で終わろうとも大げさな夢を掲げず、現実的な、時間が経てばかならず実現する夢を望み、呟く…。

「……うむ。よくわかるよ。私もねえ……後ちよつとなのよ。……後ちよつとで社会人になれるの…」

いいつつ何気にスーパーの袋から可愛らしい絵柄のノンアルコールシヤンパンを取り出す氷花…。

同じように袋から取り出した紙コップにソレを注ぎ、翔太に差し出

す……。

「……あ、そうか。…もうすぐクリスマスでしたよね…」

「ふっふっふっ…。そうよ。…もうすぐクリスマスです。大人になったら堂々とお酒も飲めるのですよ。翔太君」

博士のように語る氷花に疑問を感じながらも、掲げられた紙コップに紙コップを当てる翔太。

綺麗に響くようなガラスの音は聞こえないが、心に響くのは友情の証そのもの…。

粋のある雰囲気、二人は少し微笑みながらぬるくなり掛けた液体を飲み干す…。

そして軽くゲップをすると、二人は溜息をついた…。

「あ、お母さんが今日唐揚げ作ってくれたのを持ってきたんだ。これも食べてね」

再びスーパーの袋から取り出したのは便利なタッパーだった。

コンビニよりも美味しそうに見える唐揚げ、何故か用意のいい氷花が差し出した爪楊枝でソレを刺し、口に運ぶ。

冷めているにも関わらず、とても美味かった…。

「……僕はもうすぐ中学生。…氷花さんは高校生。…社会人に一歩一歩近づいてるのは分かるんだけど、学校で氷花さんと一緒に過ごせたのも小学生の間だけか…」

光が反射した窓を眺め、諦めまじりで呟く姿が少し寂しそうだった…。

入学と同時に、仲良しが卒業してしまう学校に楽しさを見出せない

でいる翔太…。

追いつこうと思っても追いつけない年上との差…。

大人になりたい理由は必ずしもひとつだけではなかった…。

願いが叶うなら氷花と同じ対等の人間になりたいと思う翔太…。

「……大丈夫。…歳の差なんて気にしないほうがいいわ」

頼杖をつきながら、何処か優しそうな眼差しで少年を見つめる氷花が呟く…。

そんな彼女をボケーっと眺め、小さく頷くが、それでも翔太はスネた表情をする…。

いつの頃から「年齢」を意識するようになったのだろうか？

天井の染みのひとつひとつを眺めながら、次第に心に描かれたのは父親の姿だった。

怒る父、悲しむ父、笑う父、目覚めない父の姿。

「……僕たちのお父さんってなんで早くに死んだんだ？」

「……まあた唐突に話し変えるわね」

何故このような話を切り出したのだろうか？

だが、翔太が何を思っただけでこのような話をしたのかを見抜く氷花…。

「大人」、「年齢」、そして「父」。

翔太が大人と年齢を気にし出したのは、父が死んですぐのことだった。

そして氷花も…。

無理に大人になろうとする翔太。無理と分かりつつ大人を演じる氷花。

互いが願うソレは明らかに無理がある。

氷花はまだしも、翔太には精神年齢、実質年齢がまだまだ足りないのである。

経験も無く、大人を語れるとは思っていない氷花。

同じく翔太もそうだ。口先だけでは「大人」などと主張するが、実際問題「大人」とはどういうものなのか理解出来ないでいる。

「…二十歳になったら大人なのか？…氷花さん？」

「さあ…」

翔太より大人に間近な氷花は飾り気も無い言葉で閉める。

深い溜息が氷花の髪を揺らした…。期待はずれな翔太のガツカリした表情に、

自らの素っ気無さに気がつく…。

「ま、まあ…大人の定義なんてたぶん無いわ。…よくいうじゃん？…いつまで経っても子供だね。って。…もしかしたら大人っていうのはただの勲章みたいなものじゃない？」

勲章。氷花の思う大人とは、ただの飾りのような勲章だった。

定義という言葉に「？」を思い浮かべる翔太。しかし例え話が付け加えられたおかげで、なんとなく理解する…。

「…私たちにはお父さんがいない。…死んじゃったもんは取り消せないの。…でもそんな過去があるからこそ今の私たちがいる。…

…まあ、正直にいうと私もなんでお父さん死んじゃったの？って、思うよ？」

プクプク…。と、気泡が浮び続ける紙コップの底を眺めながら呟く。互いの父親は既に他界し、手の届かない遠い遠いあの世へと旅立っていったのだ…。

だからこそ二人は日々苦勞する母を助けたいが為に、大人になりたいという夢を抱く。

しかし夢は抱けど、現実、社会は、まだまだ未熟な二人を寄せ付けようとはしない。

今はまだ母の恩恵に甘え、出来るだけ迷惑を掛けないようにすることが精一杯の親孝行なのかもしれない。様々な思いが積もり、いつの間にか黙り込む二人…。

カチコチ……。

静かになった部屋に時計の音が鳴り響いた…。

何気なくボケーツと見つめ合う二人…。睨めっこをしている訳でもないが、

ただ身動きひとつ取らず、見つめ合う。

翔太は思う、「どうして黙り込むんだ」と…。

そして氷花は、「いつの間にか私たちもこんな会話もするようになったんだね…」と、

確実に成長しつつあることを自覚する。

ふいに窓を揺らす風の音…。

それに気がつき二人は同時に窓へと目をやった…。

「……お、おお……。す、すっげー積もってるじゃんっ」

「…氷花さん大袈裟。と、いいたいけど、この積もり方……かなりすごいね…」

コタツから立ち上がり、ベランダへと通じる窓を開ける氷花。

途端に冷たい風が容赦なく部屋の中に入り込むが、今のところ十分に温まった体はそんな風にびくともしなかった…。

「…翔太君、町の明かりが殆ど消えてるよ」

雪の積もった地面に埋もれたサンダルを探し当て、寝静まろうとしている町を眺める氷花。

仕草のひとつひとつが魅力的で、当然ながらその後姿も魅力的に見えた…。

「……どれどれ」

同じようにサンダルを探し当て、机から見たソレとはまた一味も二味も違う景色を味わう翔太…。ガラス越しに見た景色とは違い、目の前に広がる静かな世界は本当に無音の世界だった…。

「一人でこの景色を眺めてたら少し寂しかったけど、……氷花さんが隣にいるから360度気分が変わるよ…」

「…またワザといってるでしょう？……そういう場合は180度っていうのよ。で、どんな気分？」

360度じゃあダメなのか？また間違ったこといったのか？と、思いながら数秒黙り込む。

音も無く降り積もる雪景色を眺めながら、言葉のパズルをひとつひとつ組み合わせ、こういった。

「……うーん。氷花さんがいるいないでやっぱり全然違うんだよ。すごく安心する。…だから本当、来年は一緒に学校生活送りたいかったよ」

中学進学とともに高校へと進学する氷花。

何度理想を思おうが、口に出そうが、それは無理な相談だった。

例えばケサランパサランに願いを込めても現実には許さないのである。

「…ていうか学校生活は無理だけど、日常生活では殆ど一緒にいるじゃん。欲張り過ぎだね」。翔太君は「

「今日はいいいと思います。ケサランパサランが一杯いるから。……今の内に自分の願い全部吐き捨てるって感じですよ。…早く大人にしてください。早く社会人にしてください。兎に角全部叶えてください」

雲に覆われた空を眺めながら手を合わせる翔太。

その動作に違和感を感じながらも、空を眺める氷花。

一向にやまない雪、今なら小さな願いごとくらいは叶えてくれそうなケサランパサラン。

「……そうねー。じゃあさ……今日一日は最高に幸せでありますように……」

「……願いですかそれ？……しかも今日はもうすぐ終わりますけど……も、もつところ、ほら、僕みたいに大人になりたいとか、早くお母さんを楽にしてあげたいとか思いつかないの？」

夢が無い願いごとに、拍子抜けする翔太……。

それでも冷たくなった手をさすりながら、空を眺める氷花は薄暗さでも分かるような微笑を浮かべていた……。

「……大人になるとか、社会人になりたいとか、いずれその日はやってくるわ。……嫌なことがあると、いいことがあると、挫折しようが、成功しようが、その日に辿りつくまでに何が待ち受けるか分からない。……でもね。……それでも私たちは歩くのみ。分かる？兎に角、ずっと歩くの。私たちは……。色々な場所を通過して、見て、聞いて、学んで、それで初めて大人っていう勲章をもらえる。と、私は思いますがなにか？」

「長つたらしく喋るから言葉の八割も理解できてない僕がいます」
バシッ。突如後頭部に氷花の平手が炸裂する……。大袈裟に驚き、叩いた張本人を見上げる。

笑っていた。そして、改めて感じた自身の背の低さ……。

この背はいつか氷花の背を越せるのだろうか？と、思う翔太は同じく笑った。

「……嘘です。本当は後半の五割は理解できました」

「
.....」

この静かな闇の向こうには何があるのだろうか？何が待ち受けているのだろうか？

冷たい風から互いを守るように寄り添う翔太と氷花は、まだ見ぬ未来をこの闇に思い描き、期待と不安を抱きつつも時間の流れに身を任せ、大人への道を歩もうと心の何処かで誓い合う…。

「…こんな風に…外を眺めるのも悪くないね」

互いの体温を感じながら翔太はあえて言葉ではなく軽く頷く…。
本当に悪くない。心からそう思う…。

どうやら氷花の願いだけは叶えてくれたケサランパサランはやがて消えていくのだろう。

だが、そのささやかな贈り物を二人は忘れない。

心のノートに思い出を書きつづり、二人は部屋の中へ消えていった…。

「「ありがとう……」」

短編小説

―それでも私たちは歩くのみ―
おわり

（後書き）

この小説は07年の12月上旬に書いた作品。

お酒飲んでたらこの小説を思いつきました。

題名は「ケサランパサラン」にしてもよかったけど、ただの日常を描くだけの作品だったので「それでも私たちは…」にしました。

お酒を飲みながらの作品を読んでくれてほんとにありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5168e/>

それでも私たちは...

2010年10月11日20時58分発行